

## 文語の苑第六回シンポジウム報告

愛甲次郎あいかふじらう

標記シンポジウムは、恆例により東洋大学の協力及び文京區の後援を得て、平成二十八年十一月二十三日（水、祝日）午後一時半より四時まで、同大學白山キャンパス、スカイホール（二號館十六階）にて開催せられき。テーマは「宗教と文語」にして、講師は、東洋大學學長 竹村牧男（佛教における詩と哲學）、元國學院大學教授 嵐 義人（祝詞について）、文語の苑理事長 愛甲次郎（宗教における文語と口語）の諸氏なり。天候は概ね良好、行事は中島幹事の司會の下豫定通り滞りなく進行せり。冒頭文語の苑加藤淳平副理事長の挨拶の後直ちに講演に入る。

竹村講師は佛教の文語の二潮流の一たる漢文讀下し文の代表として空海を取上げ、三教指歸を始め廣く

知られたる著述數點を聴衆とともに鑑賞せり。それに先立ち同講師は密教の言語觀によれば、母音、子音はそれぞれ獨自の多義的意味を有し、それによつて暗號的體系を形成、曼荼羅的構造を明らかにし、因分、果分共に可能とせりと説く。世俗的次元においても空海を當代隨一の名文家たらしめたるは、その靈性の高さにより俗塵を超えたるにありと指摘せらる。

同講師、佛教文語の潮流第二の和文脈の代表として道元を挙げ、詳細は「三田文学」二〇一七年冬季號評論「道元における詩と哲學の世界」を参照すべき旨付言。

嵐講師は自身と文語及び祝詞の係合より講演に入る。延喜式祝詞と現代祝詞の間に見る如く祝詞には一見時代の変化あれどそれを超え相通ずるものあるを指

摘。神祇文學（神と神を祭る者の文學、祝詞こそその中核）に二つの系統、宣下體（このたまふ）、奏上體（とまをす）あり。難解なる祝詞を讀解く鍵として「連語」なる概念を提案す。連語は意義の近きものを續くるものにして對句には非ず。カムロギ、カムロミの如し。全ての社を表すに「天津社、國津社」と爲すが如し。最後に祝詞にては神と結ぶために日常を避け、韻文を用ゐる點を指摘。

愛甲講師は言語に文章語（文語）と會話語（口語）の二モードあるを指摘、そのいづれか宗教に使用せらるるかを切り口に宗教と言語の關係を論ず。初期の佛教及び大藏經の中國語譯にあつては口語使用せられしもこれは布教の見地よりなり。布教より更に本質的なる超越的次元とのコミュニケーション及び感應と言ふ觀點よりすれば言語エネルギー及び幽玄の感覺を無視すること能はず。布教の觀點より言語を廢することあらば宗教自體いづれ命脈盡きんを

指摘して講演を終へぬ。

時間の制約ありしたためパネルディスカッション等を行ふ餘裕なく、フロアより質問を受くるに留めぬ。質問は嵐講師（祝詞）の資料に關する技術的質問複數に限られたり。

當日聴衆は七十人を超え、最後まで熱心に講演に聽入りたり。後に聞き及びしところによれば講演中リグヴェーダ及びコーランを聞き得しは望外のことなりし由。聖書の文語譯に對する郷愁一方ならざるにキリスト教關係の講師を得ざりしことは些か心残りなりき。